

## 2015 年度第 2 回東北支部研究会

日 時：2016 年 3 月 5 日（土）13:00 から

場 所：東北大学（青葉山キャンパス）情報科学研究科「中講義室」  
（地下鉄東西線 青葉山駅降車 北 1 出口より 3 分程度）

### 【プログラム】

13:00 開会の挨拶

第一部『被災地から考える 3.11 とテレビ』出版報告会

13:05～14:05 発表

「震災と報道をめぐるメディア・スタディーズ」

志柿浩一郎(東北大学大学院情報科学研究科 特定研究員)

「東日本大震災報道におけるテレビの功罪 - 宮城県山元町の事例から」

櫻井みや子(東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期 3 年)

「テレビ報道における福島の表象とその現実 - 福島浪江町の事例から」

佐々木加奈子(東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期 3 年)

「震災報道と地域民放テレビ局の役割」

三村泰一(東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期 2 年)

14:05～14:30 コメンテーター 佐藤崇氏 (福島中央テレビ)

14:30～15:00 ディスカッション

15:00 休憩

第二部 東北支部研究会発表

15:15～15:45 発表 1

「ポストヒューマン概念の検討のために—キャサリン・ヘイルズへの批判の再検証」

難波純也 (東京大学大学院学際情報学府博士課程 2 年)

15:45～16:15 発表 2

「放送制度論とメディア論の架橋に関する試論：社会学的新制度論を媒介として」

橋本純次（東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期 1 年）

16:15～16:45 発表 3

「メディアにおける主権者：戦後日本独立直後における Mediated Citizenship の検証」

塚田純（東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期 3 年）

16:45～ 16:50 ショートプレゼンテーション (5 分)

「ソーシャルメディア上における弱いつながりに関する研究 - 日中大学生に対する調査を通じて」

楊浩（東北大学大学院情報科学研究科博士課程前期 2 年）

16:50 閉会の挨拶

※ 各研究発表の時間は、発表が 20 分、質疑応答が 10 分、合計 30 分となっています。

※ 研究発表会終了後に懇親会を行います。

会場：未定（仙台駅近くを予定しています。会費：実費（当日、会場で徴収します。）

※ 参加予定者（発表者を含む）は、会場準備の都合もありますので、「研究発表会」および「懇親会」それぞれの出欠について、以下の参加申込先までご連絡ください。

※ 担当：志柿浩一郎 [ssi-tohoku-info@human.niigata-u.ac.jp](mailto:ssi-tohoku-info@human.niigata-u.ac.jp)

## 報告要旨

### 研究発表(1)

ポストヒューマン概念の検討のために—キャサリン・ヘイルズへの批判の再検証

難波純也（東京大学大学院学際情報学府博士課程2年）

本発表は、アメリカの文学研究者キャサリン・ヘイルズが1999年に発表した *How We Became Posthuman* のなかで提示したポストヒューマンの概念の再検討を行うために、彼女のこの議論をめぐる批判に注目する。彼女のポストヒューマンの考えは、科学技術の急速な進歩に依拠したものであり、人間の物質的な身体を軽んじているものであるという批判を、この著作を発表以降され続けてきた。そこで、本発表ではその批判に注目し、彼女のポストヒューマンに関連する一連の著作と照らし合わせながら検証することで、改めて彼女がこの概念に対してどのような価値を与えているのかを確認し、批判が必ずしも適切ではないことを示す。つまり、科学技術向上による人間観の輝かしい一新をもたらせるものとしてポストヒューマンを捉えるのではなく、この概念が引き起こす悲劇的様相も踏まえながら好意的にも批判的にも捉えようとする両義的な彼女の姿勢を確認する。（408文字）

キーワード:

ポストヒューマン、キャサリン・ヘイルズ、デジタル・メディア、レイ・カーツワイル、技術哲学

## 研究発表②

放送制度論とメディア論の架橋に関する試論：社会学的新制度論を媒介として

橋本 純次：東北大学 大学院情報科学研究科 博士課程後期1年

人口減少社会に突入した日本においては、文化の醸成や政治の監視といった地方局の機能が、これまで以上に重要になる。そうした状況のなかで、放送政策は地方局の持続可能性と独立性を担保せねばならない。

そのためには、経済的事情以外にも、実生活における視聴様式や地方局の文化など、地方における放送をめぐる現状を正確に把握し、政策に反映することが肝要である。

では、効果的な政策を実現するために、どういった事柄を検討する必要があるのだろうか。本発表は、その分析手法として「新制度論」の考え方に注目する。新制度論は、ある制度について、法令のみならず、慣習やアクターの行動規範といった「非公式な制度」をも検討対象とする考え方である。

本発表の目的は、多様なアクターが関わる「地方の放送制度」について、新制度論の視座から捉え直すことにより、今後検討すべき事柄のマッピングを試みることである。

キーワード:

放送政策、カルチュラル・スタディーズ、視聴者研究、新制度論、社会学的新制度論

## 研究発表③

メディアにおける主権者：戦後日本独立直後におけるMediated Citizenshipの検証

塚田純 (東北大学大学院情報科学研究科博士課程後期3年)

本研究は Mediated Citizenship の研究である。 Mediated Citizenship とは民主主義における「主権者」が、メディアにどのように描写されているかを調査する研究手法である。現在西欧の民主主義や日本のメディアにおいて、人々は、感想や感情を述べる役割に限定される事が多く、政治的「主権者」としての「期待」や「責任」が課せられている様子が見られない。そこで現在と異なる、新たな Mediated Citizenship のあり方を見出すべく、本研究は、メディア(ここでは東京三大紙)が、戦後独立直後、新たに主権者となった人々をどのように描写し、どのように民主主義に巻き込んでいったかを解明する事が目的である。

キーワード:

主権者、メディア、民主主義、ジャーナリズム

## ショートプレゼンテーション

ソーシャルメディア上における弱いつながりに関する研究

-日中大学生に対する調査を通じて

楊浩（東北大学大学院情報科学研究科博士課程前期2年）

本研究はソーシャルメディアにおけるオンライン上の「弱い」人間関係（ネットワーク）をいかに有効活用するかというのが出発点である。現在、世界的にソーシャルメディアの利用率が年々増加しており、ソーシャルメディアを通じて日中両国の大学生同士の交流も頻繁に行われている。このような背景において、ソーシャルネットワークに関する研究も多く行われているが、ソーシャルメディア上における「弱いつながり」を対象とした研究はまだ少ない。本研究では、これまでのソーシャルネットワークに関する研究手法や研究理論を用い、「弱いつながり」の変遷や現状を明らかにする。そして、日中両国の大学生に対して調査を行い、その結果を分析することによって、両国の大学生がソーシャルメディア上の「弱いつながり」を実生活にどう活用しているのか考察をすすめる。そのことによって、ソーシャルメディアにおける人間関係を活用する方法を提案できると考えている。

キーワード：ソーシャルメディア，弱いつながり，人間関係，ソーシャルネットワーク分析，日中比較